

疎植栽培におけるカンショ 苗節数の違いが結しょに及ぼす影響

東 孝行・宮下茂樹（鹿児島県農業試験場大隅支場）

Takayuki HIGASHI and Shigeki MIYASHITA : Influence of the Number of Nodes in a Seedling to Tuberization of Sweet Potato Cultivated under Wide Spacing

はじめに

鹿児島県におけるカンショの作付けはでん粉原料用が大半を占めているが、低価格の外国産でん粉の輸入自由化に対応して生産コストの引き下げをはかる必要に迫られている。このためには早植、疎植を前提にした多収化が望まれるが、疎植条件下での結しょの状態は明らかでない。したがって本報告では疎植条件と苗節数の違いが結しょに及ぼす影響について検討した。

1. 試験方法

シロサツマ、コガネセンガンを供試し、苗節数を6節苗、8節苗（標）、10節苗の3段階、栽植密度を80×40cm（標）、120×40cm、120×80cmの3段階で検討した。

植付は4月11日、収穫は11月17日（220日目）に行った。栽培法は、透明マルチ栽培で施肥量は標準施用量（a当たりN：0.8 P₂O₅：1.2 K₂O：2.0）とした。植付は苗節数にあたる展開葉部分の節はすべて地中に埋め込み、頂部生長点付近及び埋め込み節の葉身部分が地表面に出るようにした。また節の数え方は苗切り口から頂部に向かって番号を付した。

2. 結果及び考察

従来の作式（80×40cm、3,125株/10a）ではカンショの生育、収量面から8節苗が適するとされてきたが、本報では、疎植した場合、苗節数により結しょの状態がどのように変わるのか、また最も多収が得られる節数は何節かといったことを主に検討した。

地下部のいもは、苗節数、栽植密度の違いによらずすべて基部1節目から着生したが各処理とも地表面から2～3節に着生したものはしょ梗長が長い傾向で特にシロサツマは著しかった。

また、シロサツマでは苗節数の増加にかかわらず基部から6節目までに大部分のいもが着生し、6節目以上の節に着生したものは小さいものが多い傾向であった。しかし、コガネセンガンは苗節数が増加した部位まで比較的大きないもが着生し、シロサツマとやや様相が異なった。

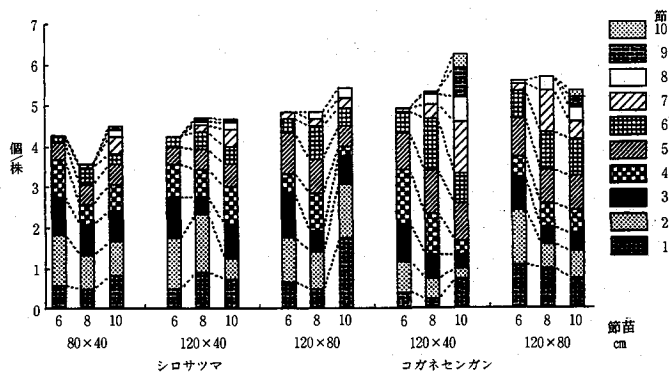
1株当たりのいも個数は、両品種とも疎植でわずかに増加する傾向であったものの苗節数の違いによる一定の傾

向は認められなかった（第1図）。

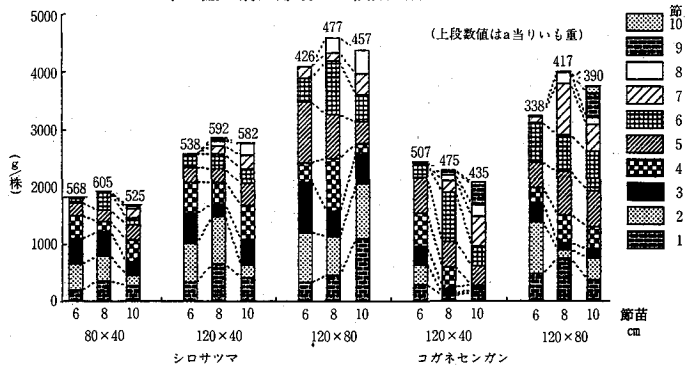
1株当たりのいも重は、シロサツマ、コガネセンガンとも明らかに株当たりの占有面積が大きい疎植ほど大きかった。また苗節数による違いは、両品種とも苗節数が増加すると上位節に着生するいも重は増加する傾向であり、特にコガネセンガンは著しかった。しかし、全体的には、両品種とも8節苗が各栽植密度にわたり大きい傾向であった。したがって、単位面積当たり収量は標準植、疎植に限らず同一の栽植密度では8節苗で最も多収が得られた（第2図）。

まとめ

シロサツマとコガネセンガンを疎植条件下で栽培した場合、植付けた苗節数によりいも着生の様相が若干異なるが、単位面積当たり収量は疎植条件下でも従来の作式と同様8節苗で多収が得られた。しかし設定した120×80cm（104株/a）のような超疎植の場合絶対収量がかなり低下することから10a当たりの栽植株数は2000株以上が必要と考えられた。



第1図 着生節別いも個数（株当たり）



第2図 着生節別いも重（株当たり）